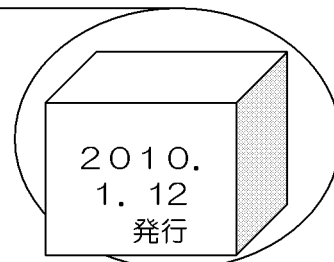


読書のまち ・かわさき 通信 当日増刊号

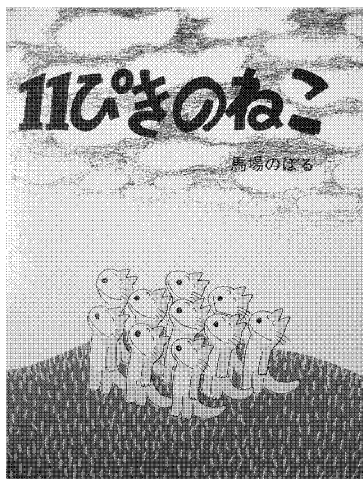


読書のまち・かわさき事業推進委員会 会長
川崎市教育委員会 学校教育部 指導課長

佐藤英和さん講演会に寄せて

馬場のぼるさんの『11ぴきのねこ』の最終ページをめくるとこんな表記に目を奪われます。

「1967年4月1日第1刷発行 2009年11月1日第158刷発行」が、それです。これだけの増刷が繰り返されてきた足跡は、とりもなおさず愛読され続けてきた足跡でもあるわけです。第1刷発行年に生まれた方は今年で43歳です。本日の講演会に参加された皆様の中には、この本と共に育ってきた方々も少なくないと思います。そして、大人になってから再読し、その絵本の楽しさや魅力を今度はお子さんに伝えている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。そのように語り継がれていく歴史そのものが、増刷の歴史、愛読の歴史だと言えます。



『11ぴきのねこ』
(こぐま社刊)
馬場のぼる作

小学生のお子さん方に絵本を読み語る時、大人が想像する以上に、お子さん方は絵をよく見つめていることに気づきます。絵を見て、いろいろな発見をし、そのことを呟いているお子さんもいます。『11ぴきのねこ』では、1ぴきずつのねこの表情や仕草の機微に気づき、いろいろ呟くお子さん方の言葉を、

対話的に活かすような読み語りも楽しいものです。やはり、“絵は言葉”なのです。だからこそ、絵をしっかりと見せたいという願いから「大型絵本」や、実物投影機とプロジェクターで絵本を大きく映したりするなどの工夫も生まれてきました。また、お子さん方を話し手、語り手の傍にぎゅっと集めて話したいと思うわけですね。

読み聞かせ(読み語り)の担い手たちをそういう気持ちにさせるのは、やはり出あわせたいと思う絵本作品の魅力そのものなのだと思います。

本日は、そんな数々の魅力ある作品の編集に携わり続けているこぐま社の佐藤英和さんが、麻生市民館に登場です。(28日10時開会)

作品が生まれる過程での作家との対話、秘話や絵本のもつ魅力などについて、様々な事例を交えた話に出あえると思います。どうか、心のメモ帳を準備されて豊かな時間と向き合っていただければ幸いです。